

勿凝学問 81

年金教育をタダでやってくれている有り難きメディアたち
——および、「政争の具と政治リスク」再考——

2007年6月8日
慶應義塾大学 商学部
教授 権丈善一

講義には、いわゆる“もぐり”さんが出席している。彼らは慶應の学生ではない。ゆえに、先週の麻疹休講の連絡が大学から彼らに行くはずがない。そこで、今週の講義の際にこんな会話をした。

「先週、慶應が麻疹で休講になっていたことは分かっていたよね」
「はい、テレビで見ましたから」

すばらしいねえ、メディアさんは。

実は、慶應の学生さんたちも、大学からの連絡などよりも、テレビをみて自分たちの大学が休講になったことを知ったようである。いくらぐらいの連絡コストを慶應は節約することができただろうか？メディアのおかげで、急遽一週間の休講に決定しても、混乱なく学生全員に伝えることが可能となったのである。メディアが報道してくれなかったら、突然の一斉休講の決定は無理だったかもしれない。

さて、本題。

メディアってのはとてもすばらしく、温泉を薄めた話しが話題になると、普通の人たちでさえも「源泉掛け流し」という言葉を理解して日常会話の中で使っていたし、事件系の用語ならばその例はおびただしく、毎日のテレビの中での連呼を受けて、国民が一生知らなくてもすんだはずの話しや言葉、たとえば「ロス疑惑」とか「サティアン」とかを当時に生きた人たちならば知らない方がおかしいというほどに、国民は覚えさせられていた。メディアによる広報ほど、国民への教育効果が大きいものはなさそうである。

そして最近、毎日毎日、年金の話題が沸騰している。そうしたなか、これまでいくら多くの人たちが国民に分かってもらおうとしても関心さえ持ってくれなかった、「申請主義」、「知らないと損をするのが年金です」、「年金はしっかりと自分で管理しましょうね」とか、これまでいくら社会保険事務所に通知を出しても見てもくれなかった葉書や書類などに、テレビを見ている人たちが一気に興味を持ってくれ、(みんな腹を立てながらだけど)年金制度をどのように利用しながら暮らしていけばいいのかについて加速度的に理解が進んでいる。その年金教育効果たるもの信じがたいほどであり、そう遠くない将来、不安をいだくほとんどのひとが「こわごわ」と社会保険事務所に足を運び、ほとんどのひとが「ホッ」とする運びとなるだろう——記録と記憶が異なることがあったとしても、今の社会保険事

務所は優しく速やかに対応してくれる。こうした最近の騒動をながめるわたくしは、取材に来た記者さんを前にして「ねんきん定期便をテレビがタダでやってくれているようなもんだよ——ありがたい話しじゃないか」と、つつい言ってしまうことになる。今朝も、産経新聞で、僕のコメントと一緒にのっていた人は、怒りながらけど、「自分の年金、自分で守る意識を」との見だしでコメントをしている。実は年金に限らずわれわれの身の回りのことはすべからく、まったくもって仰るとおりに「自分で守る意識」を持ったほうがいいのである。今の動きが、もし昔から日本人が持ってきたお上の無謬神話をはじめとしたお上という意識を捨てる方向に作用したとすれば、大変な市民教育効果であると評価することさえできる。今回の件への国民の怒りは、国民をまったくもって仰るとおりという方向に誘^{いざな}う力を持っているのが大きな特徴なのである。

ところで。

民主党と一部のメディアは、今回の「5000万円の宙に浮いた年金」騒動では参院選まで順風が持ちそうにないとかかなり正しく認識しているようであり、そこで、この機に、彼らの奥の手である年金制度論にまで政府批判を発展させようとしているみたいでもある。しかし、老婆心ながら、その作戦、本当にうまくいくのかなあと心配してしまうのである。と同時に、今回の件を今回の件——政府与党から救済策を引き出したという民主党の功績——として終わらせることなく、年金制度論まで発展させようとしていることを切っ掛けとして、わたくしはその論法にはリスクがあることを示す、本稿これから先の文章を書くことになったと理解してもらえればと思う。

いま、仮に、最近の騒動で自分の将来の年金に不安を覚えた人たちが、社会保険事務所にこわごとと出かけて行って自分の保険料拠出記録を確認したとする。そして大方は、ホッとする——テレビや新聞で、キャスターや記者が自分で自分の年金記録をチェックするために社会保険事務所を訪れる報道をいくつか目にしたけど、みんな「こわごと」から「ホッ」に変わっただけであり、残念ながら、記録が消えている！というニュースになっているのを未だ見たことがない。そして、こうした「こわごととした気持ち」をいまくのは金輪際嫌だから、この年金手帳は絶対に手元に置いておくぞと心に決めるだけではなく、これからは時々インターネットで自分の年金保険料拠出の記録をチェックしようと、心に決めたとする。

そうすると、実は、これまで声高に言われていた、「年金教育をしっかりとやったほうがいいんじゃないか」とか、「ねんきん定期便を毎年にも手元に届けた方がいいのではないのか」という——いかにも手間と金がかかりそうな年金広報活動のほとんどが、あまり大切なことではなくなってしまうことになる。これって、もしかしてすばらしいことじゃないのかな？

のみならず、年金保険料を拠出した人たちが、自分の拠出記録をしっかりと管理するようになる、将来なにが起こるだろうか？ 普通の人ならば、民主党の年金改革案である、

すべての財源を税とする基礎年金案というものに疑問をいだくようになるのではないだろうか——民主党案の下では、自分の保険料拠出記録はどのように扱われるのだろうか。

全てが無視されてこれまで未納だったと人たちと同じように扱われるの？それは、冗談じゃない。

では、彼らが約束する基礎年金の上に、これまでの拠出に対応した額が上乗せされるの？そんなこと、年金に関する彼らの財源調達方法をみると、まったく考えていないようだし。

う～んっ、分からないねえ、民主党がどんなウルトラ C を考えているのか。まあ、いずれにしても、民主党の年金改革案の下でも、保険料拠出記録の完備は必要なわけで、完備された保険料拠出記録を無視するのは、かなり難しい。以前こういう文章を書いたことがあるのでご参考までに。

ここで年金の破綻を、「過去の保険料支払い履歴が帳消しにされること」と定義するのであれば、年金保険料支払経験者が多数派を占めるようになった民主主義制度のもとでは、公的年金の破綻はあり得ず、負担と給付のアンバランスが生じれば、再びバランスがとれるような微調整をした政党が与党になり得るのであって、所得分配が大幅に動く改革や年金を破綻させることを公約する政党は、野党にしかかなり得ないということなどである。

「2004年、年金改革の意義と意味と年金論議の攪乱要因」『Ⅲ巻』p.108.

さらには・・・

公的年金では、A氏よりもB氏のほうが多額の保険料を支払い、C氏よりもD氏の方が長期間保険料を支払っているという記録がある。しかも成人のおよそ94%が、大なり小なりその記録を保有している今日、保険料拠出の記録をチャラにしまうことができるほどの政治力をもった政党や政治家がいるとしたら、お目にかかりたいものである。両大戦を経験しても、共産主義が崩壊しても、社会保険は生き残ってきた歴史を鑑みれば、保険料拠出記録を無視した政治ができる者など、古今東西、まずいないとみてよいだろう。

勿凝学問 41 [肥満訴訟よりは勝ち目があると思う年金未納推奨訴訟](#)

2005年10月29日脱稿

ということになれば、今回の年金騒動による国民への年金教育効果は、結果的には、社会保険方式を支持する、いやいや支持しないまでも一度スタートした社会保険方式の年金を租税方式に切り替えることは簡単にはできないことを理解する国民を創出することにつながりはしないのだろうか。そういうことにつながってしまったら、民主党はどうするの

だろうか。と老婆心ながら心配していたりする。政争をしかけるには、やはりリスクというものを考えなければならないと思う。政争をしかけて勝算ありの案件なのか、そうでないのか。この年金騒動、制度論にまで及ぶ大きな獲物をねらったら、いずれはかえって民主党十八番の年金改革案の首を絞めることにつながるおそれ大と読むのは、間違っているだろうか。かれこれ3年ほど前に書いた文章をみてみよう。

政争の具と政治リスク

しばしば、「年金は政争の具にすべきではない」と言われるのを耳にする。しかしながら、政争の具にすべきではない政治案件などあるはずもなく、わたくしは、政治家たるもの、与党の力を揺るがす案件があるのであれば、それを最大限利用すべきであると思う。それに、「年金は政争の具にすべきではない」といくら言っても、彼らはチャンスがあればいかなる案件であろうが政争に利用しようとするかと仮定する方が現実を捉えているであろう。「すべきでない」などと言っても実際のところまったく無駄なのである。とはいえ、政治案件には、政争の具にするのにリスクの高いものと低いものがあることくらい、政治家には知っておいてもらいたいとも思う。メディアが乗ってくれさえすれば、世論を動かすことは不可能ではない。しかしながら、世論を動かすために、ウソの話をしなければならぬ政治案件は、政争の具にするには、少々リスクが高いということも、政治センスのひとつとしてわきまえておいた方が良いでしょう。江角マキコさんの年金保険料の未納が政治家に飛び火する発端となった3閣僚の未納が発覚したとき、政治家に未納者が存在することは根本的には、年金の使い勝手が悪すぎるという制度欠陥、年金のユーザー・インターフェースの欠陥が原因であった。したがって、議論すべきことは、まさに民主党が提示していた年金制度のシンプル化、一元化への道筋作りだったのである。こういうことは、年金制度について少し知っている者ならば、普通に推測がつくことであった。ところが、民主党前代表は、年金一元化への道筋作り以上のものを求めてしまったのか、未納3閣僚の発覚という事実を大きな獲物をねらった政争に利用しようとした。しかし論理の大きな飛躍がなくては年金未納の3閣僚を責め立てることができる事柄ではなかった。年金未納を政治家個人の倫理問題に帰するという、見るからにウソの話しを国民に信じ込ませてしまった。その後の展開は、みんなが知っている通りである。全党に、未納者が続出しただけでなく、民主党前代表は自分の未納までもが発覚してしまい、その件については本来代表辞任などという責めを負うようなことをしてもいないのに、代表を辞任せざるを得ない状況に追い込まれた。彼がテレビ出演の梯子をしながら国民に訴えていたことは正論であったのである。しかし正論が通じないまでに世論の狂気を演出した責任の過半は彼にあった。わたくしからみれば、ウソの情報を流さなければ政争になり得ない政治案件を利用するという、リスクの高い戦略を選択して政争をしかけたがゆえの結末であり、彼の読みのセンスに難があったのであろうとしか評しようがない。

勿凝学問8 [年金報道の見分け方](#)

3年ほど前に書いた文章に少し反省をこめて・・・。

97年に基礎年金番号が導入されたことがキーワードとなった今回の件——この基礎年金番号の存在と、コンピュータが今ほどに発達した今日の状況を考え合わせると、実は年金のユーザー・インターフェースを高めるための年金一元化という必要性は、ほとんどなくなっているような気がする。将来、基礎年金番号に統一した方法でコンピュータ管理して、チップが埋め込まれた年金カードでも作られるようになって近くのコンビニで簡単に拠出履歴をチェックできるようになったり、基礎年金番号を自宅のパソコンに入力すれば簡単に拠出履歴を見ることができるようになれば、年金制度が山ほどあろうが、ひとつであろうが関係なくなるだろう（こういうことは高速道路でETCを利用する度に考えてしまう。僕が日本中のどこにいるのか残念ながらクレジットカード会社には簡単にバレてしまっている・・・）。

ユーザー・インターフェースを高めるという理由に基づく年金制度一元化の必要は、紙の記録を保存することで年金記録を管理していた時代には高い優先順位をもつ政策であったかもしれないけど、いまとなつては、あまり重要な話しでないだろう。もっとも、もうすぐ、官民の保険料率と給付を揃えるという視点から、厚生年金と共済年金が一元化されてひとつの厚生年金となり、この国には、厚生年金と国民年金のふたつしか存在しなくなるようだけど、それ以上の一元化は、所得捕捉率の問題などハードルが極めて高い問題に目をつぶったり、従来の制度との整合性を無視して租税方式に切り替えたりしながら推し進めるほどのものではないのではなかろうかと、素朴な疑問をもってしまう。

追記——上記の文章を書いた翌日

上記「勿凝学問 81」（および次の「勿凝学問 82」）は、週末に学生たちと福島奥地の温泉に遊びに行く際の電車の中で書いた文章である（彼らとは現地集合）。温泉と地酒を愉しみ、今晚帰宅。そして今日6月9日の朝刊にある「民主党公約案骨子」を見る——これまでもいつもそうだったけど、彼ら民主党は、選挙、国民を思いっきりなめてるね（笑）。

民主党公約案の骨子の筆頭に次の二つの文章がある。

1. すべての保険料納付記録を記載する「年金手帳」を全加入者に交付
2. すべての年金を一元化し、基礎年金部分と所得比例部分の2階建てに。基礎年金部分は全額税でまかなう。

「民主公約、年金に重点」『読売新聞』2007年6月9日4面

2004年の時の民主党年金改革案とは、姿形がまったく違うじゃない——などとはここで言わないでおこう。

この雑文のストーリーと関連する話として、まず、「[勿凝学問 65 柳家さん八師匠の年](#)

[金高座](#)」中の一文(p.4)を紹介しておこう。柳家さん八師匠、曰く。

仮に一元化したとして、今までの制度との整合性をどうするのかねえ。今まで保険料をきちんと納めてきた人と、そうじゃない人をどう区別するんでしょうか。一元化すれば、今までの基礎年金分に上乘せしてくれるのならうれしいけど、どうもそんな話じゃなさそうだし。難しいねえ。

さらに、これまでも次のような文章を書き続けてきたことを、再度確認しておこう。

例其の壱

・・・この国に、Cool heads but warm hearts¹（冷静な頭脳、されど温かい心）を持った政党、要するにちゃんとした計数感覚を備えたリベラルな政党が誕生し、まともな2大政党制が生まれるなど、やはりあり得ないことなのかもしれないと思ってしまう。その意味で私見ながら、この国には、将来2大政党の一翼を担うべき政党が、未だ姿を現していないと思っている。

随分と前になるが、さすがに下記、カエサルが紀元前に書いた文章を読んだ時には、ヨーロッパには2000年以上も前から2大政党制に慣れ親しむ土壌があったのかと、呆れてしまった。

カエサル(BC52年頃) 『[ガリア戦記](#)』／國原吉之助 邦訳, p.213.

「ガリアでは、どんな部族国家においても、どんな郷や地区においても、のみならず、ほとんど一つ一つの家族の中にすら、対立する二つの党派が存在する。党派の首領は、その人の意見や判断にもとづいて、あらゆる問題が最終的に決定されるような人物であり、ガリア人の輿論形成に最大の影響力を与えられている」

日本で、国民が2つの党派に所属し、2つの政党の党首がまっとうに議論をして、輿論形成に最大の影響力をもつ日が来ることを夢みるなど愚かなことなのだろうかね。〔III巻, p.525〕。

勿凝学問 39 [9.11 総選挙に向けた各党マニフェストをながめての雑感](#)

2005年9月3日脱稿

例其の弐

2004年の参議院選挙で野党に一匹目のドジョウをつらせたのは、日本の政治にとって大きな禍根を残してしまいました。彼ら野党はあの味が忘れられない。だから、数年後の次の選挙の際に、政治的風が訪れるとすれば、そのときは、野党は再び凝りもせず年金で勝負を挑んでくる可能性はゼロではない〔III巻, p.545〕。

¹ 「勿凝学問 20 [ノーベル経済学賞と学問としての経済学、そしてノーベルが思いを込めた平和賞](#)」参照。

．．．

個人的には、旧民主党とはまったく異なり、まさに多くの世論調査に表れる政府規模選好やインテリがいただく今日的不満をすくい取る新しい野党の誕生が必要だと思っています。はたして新民主党がそのポジションを占めるのか、それとも、民主党は短期的視野のもとに与党の成功例を真似るだけの、わたくしにからかわれるだけの存在にとどまり、新たにまともな野党が登場するのか、高みの見物を楽しみたいと思っています。この点、2004年参議院選挙における年金問題での甘い成功体験が、結局、あの政党を崩壊させてしまうのではないかという予測の方が、わたくしのなかでは強い。努力の裏付けのない成功体験は、往々にして人や組織をだめにしてしまうものです。9.11総選挙に際し、民主党がまたもや年金で勝負をしようとしたことに対する落胆と呆れは、「[勿凝学問 38 もうひとつの終戦記念日 2005年8月9日——映画〈黒部の太陽〉と民主党の〈年金改革案〉というものをみてみたい](#)」(2005年8月13日)をご参照ください。7月に民主党に呼ばれた勉強会では、一年前と違ってメディアはちゃんと勉強しはじめたから2004年年金改革を否定して勝負しようとしても、メディアはついてこない、だから勝ち目はないと言ったのに。残念です。

わたくしがウェブ夫妻などを面白がって読んでいるのも、自分の意向に沿ったまともな政党が世の中に存在しないときに、彼らはどのようにして、新しい政党——Labor Party——を作っていたのかを知ることができるからです〔Ⅲ巻、pp.548-9〕。

勿凝学問 41 [肥満訴訟よりは勝ち目があると思う年金未納推奨訴訟](#)

2005年10月29日脱稿

例其の参

功名が辻と民の疲弊——往々にして政局は民を疲弊させる

話をややこしくしているのが、「とにかく政権をとる。政権をとって何をやるかは、政権をとってからお教えします」という、悪徳商法まがいの戦略をとっているようにみえる、現政権与党のライバルさんたちの存在である。首相の「追加費用の全面廃止」という失言の後、与党の議員さんたちは、追加費用について少しは学習したようで、首相の失言を責めることもなく無視する形で、大人の対応をしめしてあげた。しかしこの過程を、不学無分別なメディアさんや学者さんたちが、官僚の抵抗に押し切られたと喧伝する。そしてこの〈官僚の抵抗に押し切られた〉厚生・共済年金一元化改革法案は、来年の国会に提出される。ところがその国会の直後には、参議院選挙が控えている。政権をとって何をやるかというよりも、政局を引き起こして、政権を獲ることにこそ目標を置いているようにみえる野党さんたちには、これは願ってもないチャンス。

最近、日曜日の大河ドラマなんかをみていると、腹が立ってくる場面がある。毎週毎週、主人公夫婦は、「功名、功名」と連呼しているんだけど、彼らが功名をあげ

るためには戦^{いくさ}がなければならない。でも、戦^{いくさ}つてのは、どうしても民を疲弊させてしまう。こうしたデリカシーに欠ける場面をみていると、今の政治シーンが重なってしかたがない。政権交代につながる政局つてのは、ようは与党がやっていることを野党が批判してはじめて生まれる局面なんだけど、実に厄介なことに、与党の悪政と政局の勃発とが、必ずしも1対1の対応をしないのである。

国民（投票者）が公共政策に関して完全情報をもっているのであれば、与党の悪政と政局の勃発は1対1の対応をなすのかもしれない。けれども、ほとんどの場合、国民は公共政策に関して不完全な情報しかもっていない。したがって、野党は、巧妙な情報操作をすることにより、与党の善政を相手取って政局に持ち込むことも可能となってしまう。その時、災難なのは、国民。

「勿凝学問 42 [民主党偽メール問題の成り行きと年金未納未加入問題再考](#)」(2006年4月1日)で、次のような文章を書いた。

1年ほどのちの民主党勉強会（2005年7月21日）で、わたくしは、直前にあったロンドン同時多発テロ(7月7日)を思い出しながら、元民主党代表菅氏の業績を、「参議院選挙を勝利に導く人類史上稀にみる自爆テロの成功」と評価した[「勿凝学問 36 [どの世界にもいるはずの気概のある異端たちへ——自民・民主勉強会での説明の正確さを期するためのメモ](#)」(2005年7月26日)参照]。彼は、未納三兄弟キャンペーンを張った。だが、みずからの未納発覚ゆえに代表辞任。しかし、7月11日の参議院選挙で民主党に勝利はもたらした。大した偉業である。もっとも災難だったのは国民であり、彼らは必要以上に年金不信をすり込まれ、将来不安を植え付けられた。

「2004年年金改革法案」をもっと正当に評価すれば、国民はいまよりも生活不安から解消され、したがっていまよりもはるかに豊かな生活を享受できているはずであるのに、年金を政争の具とした「2004年年金騒動」という政局、すなわち政治家さんたちの戦^{いくさ}のなかで、国民は必要以上に年金不信をすり込まれ、将来不安を植え付けられてしまった。こういう卑劣な行為、すなわち「専門情報を司る職業」に就く人びとが、功名をあげようという浅はかな欲求を満たそうとするあまり、(意図的にか無意識のうちにか) 誤った情報を流して民を疲弊させる行為つてのが、どうも、生来さぼり癖のあるわたくしを机に向かわせ、雑文を書かせ、挙げ句の果てにはサンチョ・パンサを登場させるようなのである² [Ⅲ巻, pp.564-6]。

² なお、2大政党制の意味については、次のように書いたことがある。

「勿凝学問 41 [肥満訴訟よりは勝ち目があると思う年金未納推奨訴訟——および9.11総選挙その後と厚生・共済年金一元化](#)」(2005年10月29日)

例其の四

連合の高木剛会長は29日、盛岡市内で記者会見し、今年の統一地方選と参院選について「統一選は推薦候補の全員当選に尽きる。その余勢を駆って参院選では野党で過半数を獲得したい」と述べ、民主党などと協力し、政権交代を目指す考えを強調した。

・・・

連合会長の高木氏の発言も、示唆に富む。連合という労働者組織——野党とともに心中してもらうには惜しすぎる存在なんだけど、それも美しい死に方なんだろう。僕は、労組の人に会う度に、次のように世間話をしている。「日本の労組は政党と独立して労働に益する政策を掲げる政党を是々非々で支持していく主体的浮動層³をめ

(2005.9.11 総選挙の結果) 与党が圧勝しすぎて、2大政党ではなくなったと言うような人が出てくることも想像できますけど、2大政党というのは、いつも数が伯仲しているわけではなし。サッチャー時には、サッチャーは労働党は永遠に死んだと言ってまして、保守政権が18年もつづきました。労働党が97年に政権に復帰したときは、地滑りの勝利で保守党は壊滅状態。そしてあれから8年も労働党がつづいていている。20世紀初頭の選挙では、党首パルフォアさえもが落選しています。

2大政党というのは、そういうものなのです。

オセロゲームやアタック 25 みたいなもの(?)。でも、ころころと短期間に变化するわけではない。圧倒的勝利によって、いったん政権をとった政党は、すぐに支持を失うような愚かなことをあまりやらない。次の野党の地滑りの勝利までには、相当に時間がかかるわけです。

われわれ民主主義のユーザーにとって、政権が「変わること」が望ましいことではなく、次の選挙で政権が変わる可能性が絶えず存在するために、与党に、われわれ民主主義のユーザーにとって「望ましい政策を実行してもらうこと」が期待されるわけですし、それでよいと思っています。経済学で言うコンテストブル市場のようなものを期待できるのではないか。規制緩和を理論的に支えたコンテストビリティ理論は、経済学の世界では嘘であることがわかって自滅してしまいましたけど、政治の世界ではある程度有効であり、世襲や禅譲で後継者が決まる専制や独裁のような強い規制のもとでの政体よりも、権力者選別の規制が大幅に緩和され、入れ札で決められる民主主義の方がはるかに望ましいように思えます。

³ 「[勿凝学問 46歳出削減はいつまでつづくのか——この国には新自由主義とか市場原理主義の政治家はなどいない](#)」より

ざし、この国でキャスティングボードを握ることによって勢力の拡大を図っていったらどう？ この国にも労働党を作ってみないかい（笑）。でも、日本の労組はしがらみってのがお好きなようで。

この国の対立軸は、明らかに経済界対生活者＝労働であって、生活者＝労働の支援者が弱すぎるんだから⁴、労組の生きる途は確実に目の前にあるように見えるんだけど、惜しいことだ。日本の労働組織率が18%程度で低すぎるといわれているけど、フランスの労働組織率は8%。それでも、なんとか政策形成では経済界に拮抗する役割をはたしているのに——まあ、歴史と制度枠組みが違いすぎるんだけど、日本の労組がこのまま消えていくのは、まったくもって惜しいことだよ。

勿凝学問 64 [政治的選択肢がないこの国の不幸せ——労働党でもつくってみないか？](#)

2007年2月5日脱稿

「主体的浮動層」とキャプテン ジャック・スパロウ

先日、かつて中央公論の編集長をつとめた粕谷一希氏の『[作家が死ぬと時代が変わる——戦後日本と雑誌ジャーナリズム](#)』を読んでいたら、「主体的浮動層」という言葉を見つけた。

私は「反体制」にも反対だが、「助言者」にも限度があると思っている。
永井陽之助さんが言っていた「主体的浮動層」というポジションが一番いい。浮動票という言葉があるが、インテリの役割というのは主体的な浮動層だと永井（陽之助）さんは言っていた。あるときは、最大の政治権力に対する批判者となり、あるときは統治者と協力して一つの政策を実現する。こういう立場を「主体的浮動層」と名づけたのである。私はジャーナリズムも、本来は主体的浮動層でなければならないと思っている。

粕谷(2006), p.271.

「主体的浮動層」——実にうまい表現である。同じ事を言うにも、わたくしがこれまで何度か使ってきたジャック・スパロウとは、品格が違いすぎる（涙）。

でも、ここはわたくし流に・・・。

映画『パイレーツ・オブ・カリビアン Part1』のなかの一コマより		
出演		
不真面目な海賊	キャプテン ジャック・スパロウ	(ジョニー・デップ)
ヒロイン	エリザベス・スワン	(キーラ・ナイトレイ)
ヒーロー	ウィル・ターナー	(オーランド・ブルーム)
	エリザベス	「ジャックはどっちについてるの？」
	ウィル	「今は、こっちの味方みたいだ」

⁴ 「勿凝学問 54 [外需依存のリストラ景気か内需依存の規制緩和景気以外に途はないのか？——対立の軸は「勝ち組対負け組」などではなく「経済界対生活者＝労働」だろうよ](#)」参照。